

2011年9月12日

M2 森 多恵子

小倉ゼミナール 9月定例ゼミ報告

I 事務報告の部

1. 日時

2011年9月10日(土) 10時00分～18時00分

2. 場所

放送大学東京足立学習センター 講義室3(6階)

3. 出席者

小倉 行雄先生

三宅 章介氏(株式会社ブックス)ほかカメラ担当の方1人

神谷さん、高橋さん、野崎さん、早川さん、森(以上、M2)

牛山さん、倉持さん、多田さん、諸橋さん(以上、M1)

合計12人(内、ゼミ生9人)

4. 配布資料

(1) 古い歌謡曲に学ぶ文章のコツ

①『古い歌謡曲に学ぶ文章のコツ 喫茶店の片隅で』

②『古い歌謡曲に学ぶ文章のコツ 回答』

(2) ジャーナリズム列伝

①『ジャーナリズム列伝 原寿雄〈構造分析〉』

②『ジャーナリズム列伝 91～95』、原寿雄、朝日新聞 2011年8月12日、13日、16日、17日、18日

(3) 松本憲和・久米真美『クイズで学ぼう! 古典文法[基礎編]』、新評論 2011 8・9

5. 回覧資料

①『NHK テレビテキスト 2011.9 仕事学のすすめ 弁護士 伊藤真』、NHK 出版

②DVD『DOIT!シリーズ VOL.85 いい会社をつくりましょう』(株)ブックス

③天三商店街の活動紹介 DVD (同商店街作成)

6. 時間割

10:00～10:10	ゲスト参加のブロックス社三宅章介氏の紹介
10:10～10:20	小倉ゼミ論文づくり講義実況中継の DVD 制作意図と内容紹介
10:20～11:00	今日の講義内容と意義
11:00～11:15	休憩・ストレッチ
11:15～11:30	8月開催大阪調査ツアーと夏合宿の報告
11:30～12:10	宿題1 ゼミ生があげる「いい文章」についての検討
12:10～13:30	昼食休憩、ブロックス社による小倉先生インタビュー収録
13:30～14:00	今後のゼミの内容と予定
14:00～15:15	宿題2 レポートⅠおよびレポートⅢの相互評価と検討（前半部）
15:15～15:30	休憩・ストレッチ体操
15:30～16:50	宿題2 レポートⅠおよびレポートⅢの相互評価と検討（後半部）
16:50～17:00	休憩
17:00～18:00	今日のまとめ、参加者からの一言発言

Ⅱ ゼミ内容の部

9月ゼミでは、一日を貫く中心テーマが立てられた。これは「評価の軸をつくる」である。小倉ゼミでは1日の時間をかけても、やることが多い。そこで、ゼミが全体として何をやるか、ゼミ生にわかりやすく示す必要があるからである。より具体的には、教材の『論文づくりの方法論』から評価の軸を引き出し、これにより9月の宿題である「いい文章」の評価検討や、レポートⅠ・Ⅲの相互評価を行ったことである。評価軸を引き出す際には、小倉先生の講義を踏まえたゼミ生のグループ討議が取り入れられた。こうした実習的作業を通して、学びの方法について体得的に学びとることも今回のゼミにおける大事な狙いとなる。また、この日は、ブロックス社によるゼミ授業のビデオ撮影が行われた。これは、11月に行われる小倉ゼミ講義の実況中継 DVD 制作にかかる準備のためである。授業の実況中継 DVD は、放送大学で使用する映像教材になる。授業内容は盛り沢山であり、講義と撮影の両方からもたらされる緊張感に包まれたゼミになった。

1. 小倉先生による講義

小倉先生からは、以下の3つの題材に関し、どう評価の軸を立てるかについて講義があった。そこでは軸を立てる方法を知り、自分で実践してみることが大事だと説かれた。

(1) ゼミ生があげる「いい文章」の検討

9月ゼミの宿題1は、ゼミ生各自が「いい文章」を選び、選んだ理由と共にメーリングリストでゼミの開催前に提出するというものであった。

まず、文章を書くことの基本を考える。社会生活においてものを書く場合の基本は、仕事に即した身近なレベルで文章を書くことにある。たとえば、メモ・レジメ・メール文・ノート取りと一括される文章が難なく書けるかである。これをどこへ持っていっても通用するレベルに引き上げる。こうして、基本的なことができるようになれば、それを組み合わせさせて複雑化し、高度化することができる。つまり、応用が可能になる。

放送大学の論文指導ゼミの学生は、論文を書くことを目的とする。しかし、ここへ行くには、メモ・レジメ・メール文・ノート取りといった実用文や説明文の基本単位になるものがきちんと書けないといけない。これらができないと、レポートや論文には至らないからである。ゼミの短い時間でこの訓練を行うため、ゼミ生から自分なりに受けとめた「いい文章」を宿題のかたちで出してもらった。また、レポートⅠ、Ⅲの概要版については、ワークシートによる相互評価を行った。けれども、この提出結果でみると、ゼミ生にとっては、文章を読むにせよ書くにせよ、適切な評価の軸を持つことの大事さに気づかせるのが第一だと思い至った。こうして、本日全体のテーマを「評価の軸をつくる」とし、実習的作業によりそれを行うことにしたものである。

まず、何を「いい文章」とするかを検討である。文章評価の軸をどう立てるかに関する具体的内容は、あとの(3)において述べる。したがって、ここでは文章のよしあしを評価する訓練の場合、どのような対象素材を選択したらよいかについてふれておこう。これは、文章技法上のレベルが高いエッセイ的な文章より、実用文を選ぶほうがよい。情感で押すのではなく、論理的に事実を述べたもののほうが訓練には適しているからだ。

次は、文章の構造をつかむことである。これもこの(3)や、2の(1)、(2)、(3)、(4)の記述と関連するので、後廻しにする。

それから、「いい文章」の評価といっても、具体的次元で評価することが大事である。たとえば、「短文が多くてよい」という記述はどうか。これは評価としては十分でない。指標尺度として、あいまいさが残るからである。これに具体性をもたせるとしたら、外形的要件にする。つまり、外からでも分かるかたちで示す。このため、「短文」を「40字以内」と言い換えてみる。この数値は、統計心理学にも裏付けがあり、具体的である。このとき、いちいち40字を数えるのではなく、ワープロの特性を用いれば仕事は早くなる。つまり、Wordの書式では、一般的に1行は40字とされる。そこで、「短文=40字以内の文=1行以内の文」と考える。こうして、1行の中での句点の数をチェックしてみる。これにより、「全体の8割が1行以内の文である」と具体的に表わすことができる。これに比べて、「短文」という表現は、いまだ主観の域にとどまる。これは人によって違う。もっと具体的なかたちにして、人に伝えられる表現にしたほうがよい。

(2) レポートⅠ・Ⅲのゼミ生による相互評価

続いて、9月ゼミの宿題2である。宿題2は、レポートⅠ・Ⅲの概要版を基としたゼミ生同士による相互評価である。ゼミ生は、レポートⅠ・Ⅲの概要版をメーリングリストにより事前に提出している。また、評価シートにより、ゼミ生同士で相互評価を行った。なお、

ゼミ生は、8月に大学へレポートⅠ・Ⅲを提出した。さらに、先生から、授業後は各自が他のゼミ生による自己への評価シートを持ち帰り、今後の参考として生かすようにとの指示があった。

レポートのゼミ生による相互評価は、後から振り返ってみれば、レポート評価の軸を持つようにする訓練であった。たとえば、評価軸を入れ込んだ評価シートにより、実際に他ゼミ生のレポート評価を行った。また、評価の際は、評価対象や評価項目の外形的意味だけで点数を記入せず、評価項目の意味をよく知った上でワークシートに書き込むことが前提になっていた。

しかし、これも実際のところは必要でないことばかり目に入り、必要なことは目に入らないという状況であった。そこで、先生からの実習的課題として、M1 諸橋さんのレポートⅠの評価を行った。これは後述の(3)で得た軸も使い、M2 生が相談協議するかたちにより行った。その結果、修正すべき項目としては、以下の点があがった。当初のメーリングリストで提出された評価シートより、遙かに多くの指摘があがることになった。

① 表紙の書式

- i フォントが全編ゴシック体（当初）
- ii 作成年月日や氏名表記は右上位置に記入する
- iii 節題表記（ナンバリング）がおかしい
- iv 大項目と中項目の頭出し位置がおかしい

② タイトル

- i タイトルが長すぎる
単位要素を少なくすれば、短くなる。
- ii 短く、全体を象徴する内容のタイトルにする
- iii 「教育」という言葉が重なっている
- iv 「質保証」という言葉がタイトルに入っているのに本体では何の説明もない
- v コロン(:)や記号などの使用は避けるべき

③ 本文書式

- i 数字は半角を用いる
- ii 年号を西暦に統一する(和暦を用いるときは、カッコ内で用いる)
- iii 箇条書きは用いない(文章にするか、番号を振る)
- iv 説明すべき箇所では全編にわたり説明がない
- v 文章は1文で40字以内に納まる短文で書く
- vi 行間を不規則に空けすぎない
- vii 図表データに出所がない
- viii 本文にはページ番号をふる

一方、M1生のグループは、M2久保さんのレポートⅢについて評価を行った。そこでは、章立てがしっかりしていることや、表記書式がよいことが指摘された。また、小倉先生からも、柱だけで切り離しても意味がよくわかり、全体の流れがよいと評価された。

(3) 『論文づくりの方法論』から評価の軸を引き出す

小倉先生作成のゼミ教材である『論文づくりの方法論』を用いて、そこから評価の軸を引き出す作業をした。これにより、いい文章を評価する場合も文章を作成する場合も、共通の判断軸で行えるようにした。ここで注意すべきは、評価の軸をつくるための方法を知るといっても、単に頭の上でわかった積もりだけではいけない。実際に手と体を使って、家でも訓練することが欠かせない。なお、この討議は、ゼミ生をM1とM2で2つのグループに分け、討議形式により行われた。

評価の軸を見つける作業は、具体的には次のようにして行った。まず、教材の『論文づくりの方法論』から引き出すべき文章評価とレポート評価の軸として、小倉先生から次の3つの項目が示された。①基本的着眼点となる内容が記述されているページを探す、②外形的要件からのチェック内容が記述されているページを探す、③わかりやすさ・伝わりやすさという内容が記述されているページを探す。これを受け、ゼミ生は教材から各項目にあてはまると思う該当ページをあげる。最後に、全体項目のバランスも考慮した。この検討結果は表1において示した。

表1 『論文づくりの方法論』から引き出すレポート評価の軸

軸の性質	教材該当ページ	具体的内容
1. 基本的着眼点となるページ ⇒柱(大項目)を評価する基準	p.52 p.62 1.(6)①～⑦	テーマ・構成・方法に納得性が高いか
2. 外形的要件からのチェックリスト ⇒外形的要件の重要チェック項目	p.74 p.71～73	①表記書式の基本ルールは守っているか ②文章の書き方の基本を守っているか ③文章の構造がしっかりしているか
3. わかりやすさ・伝わりやすさ ⇒わかりやすさ・伝わりやすさのチェック項目	p.52 p.17～18 p.45～46 p.40～42	①タイトルはテーマを的確に表しているか ②柱が明確か ③メッセージ性があるか

2. 配布・回覧資料の説明

(1) 古い歌謡曲に学ぶ文章のコツ

①『古い歌謡曲に学ぶ文章のコツ 喫茶店の片隅で』

1955年にヒットした(最初の発売は1951年)歌謡曲「喫茶店の片隅で」が教材である。この歌詞の書かれたA4資料が問題編になる。この歌詞のどこがいいのか、文章を書く上で何を学ぶか各自あげてみよ、というクイズである。

②『古い歌謡曲に学ぶ文章のコツ 回答』

上の回答編である。「喫茶店の片隅で」の歌詞は、映像的であり、感覚に訴える。書かなくてもいいことは書いていない。書くべきものだけを書いている。また、各連ごとに視点が変わる。遠景から近景、時の経過・回想などの技法を使って、異なる視点で描かれている。これにより、情景が見えてくる。さらに、リズム・調子があるので、読みやすい。

(2) ジャーナリズム列伝

①『ジャーナリズム列伝 原寿雄〈構造分析〉』

②『ジャーナリズム列伝 91～95』、原寿雄、朝日新聞 2011年8月12日、13日、16日、17日、18日

記事の内容と構造分析から、文章を書く場合の教訓を引き出す。回答編における構造分析は、ゼミ生各自、家に帰ってからよく読んでおくこと。

(3) 松本憲和・久米真美『クイズで学ぼう! 古典文法[基礎編]』、新評論 2011 8・9

これは、ジャンルでいえば、受験参考書に入るものである。しかし、社会人にも有用な書であると謳う。社会人の眼でみても、これだけやれば基礎力が十分についたと実感される内容を入れ込んだという。ここに単なる受験参考書との違いがあり、また小倉ゼミの授業と共通する基調がある。

(4)『NHK テレビテキスト 2011.9 仕事学のすすめ 弁護士 伊藤真』、NHK 出版

この中で伊藤真氏が述べている方法は、小倉ゼミの考え方に通じる。学びの方法が重要であるという点である。たとえば、本の読み方、ノートのとり方、メモのとり方、さらには考え方、考える方法について、あるいは勉強の方法について、日本の教育では教えてこなかった。しかし、学びの方法を知ること、これを教えることは重要である。北海道大学の名誉教授である米山喜久治先生も、物事は一般に5割のオーダーを超えると、全体的な構造が変わるといっている。大学進学率が5割を超えた今日は、臨界点になる。こうしたとき、大学が学びの方法を教えないままでは社会的な問題ともいえる。

(5) DVD『DOIT!シリーズ VOL.85 いい会社をつくりましょう。』、(株) ブロックス

ブロックス社による伊那食品工業紹介のDVD映像である。伊那食品の社員の働く日常を紹介し、会社の日常活動であるが、一般には知られていない舞台裏的な場面を多く紹介する。これも、DVDの価値を増すことに貢献している。

(6) 天三商店街紹介の DVD

天三商店街の活動紹介的な内容の映像である。天三商店街に訪問した際、土居年樹理事長のお話の後で、映像を見せていただいた。後日、小倉先生の許に送付いただいたのがこのDVDである。映写時間は8分程度と短い。

3. 大阪調査ツアーと夏合宿概要

8月に行われた大阪調査ツアーと夏合宿の概要について、小倉先生から報告があった。以下、訪問先ごとに要旨をまとめた。

(1) 天神橋3丁目商店街

天三商店街の土居理事長は、商店街の担い手となる者を街商人（まちあきんど）という独自の言い方でとらえる。街商人は、自らの商売を通じて街の健全な発展を促し、支える存在である。こうした街商人というとらえ方から、商店街の存在意義や商店街の事業として何をなすべきかが出てくる。すなわち、商店街は商売を通じて街の健全な発展を促し、支える事業に取りくむべきといえる。それは一般に文化性を持ち、まちにおける生活に楽しみをもたらす事業や、顧客と店・商店街の関係性を強める事業のことといえる。しかし現実には、商店街が自らの使命としてこのような事業に取りくむところは多くない。

(2) 天満天神繁昌亭

上方落語を演じる定席は、戦後、60余年途絶えていた。そうした中で、繁昌亭は、地域商店街や関係各所との連携とネットワーク、さらにまちづくり運動的要素も加わり、つくりあげられたものである。

(3) 千林商店街

千林商店街は、大都市内における近隣型商店街である。千林商店街は大阪という大都市に存在するが、旭区というやや場末の地域に立地する。660mの街長を持つ商店街の両端に電車の駅があり、後背地人口はそれなりにある。したがって、通行量はピークの60年代末に比べ落ちたとはいえ、十分にぎわいを感じさせる。

では、大都市内と限定するにせよ、千林商店街が近隣型商店街であると規定する理由はどこにあるか。これは、同商店街が周辺の住宅地域を背景商圏として持ち、衣料品など日用・最寄品主体の商店街であることも一因となる。しかし、より多くは来街手段からの判断が大きい。すなわち、同商店街の来街客のうち自転車利用の客が全体の6割も占めるといえる。この比率はきわめて高い。また、自転車はいうまでもなく近隣型・単身型の典型となる移動手段である。

このようにみると、話は調査時における相手の話の聞き方に関連してくる。すなわち、調査ヒヤリングにおいて相手の話を漫然と聞いているだけでは、大事な情報はほとんど耳

に入らない。調査では何らかの軸をもって「きく」ことが大事になる。そうすれば、「きく」べきことも一瞬のうちに耳へ入るようになる。

(4) あべのキューズモール

あべのキューズモールは、従来のショッピングセンターに見られないテナントの組み合わせを実現した。これは渋谷 109 という若者をターゲットにしたトレンドィーな店とイトーヨーカ堂という日常性を代表する店を共存させたことである。ショッピングセンターには多くのテナントがあるといっても、そこでまったく異なった客層をターゲットとする店舗を同居させることは、適切でないと考えられてきた。ショッピングセンターのコンセプトを混乱させ、営業的な結果を出しにくくするからである。それゆえ、これまでの商業施設では採用されてこなかった。

しかし、あべのキューズモールは、あえてこれまでの原則破りに挑んだ。この点は、イトーヨーカ堂がショッピングセンターの中でどのくらいの売り場面積を占めているかをみると、よりはっきりする。そこで、あべのキューズモールにおいて、イトーヨーカ堂がどのくらいの売り場面積を占めているか、フロアマップによりみてみよう。そうすると、イトーヨーカ堂は、地下1階（フードコート、食品）、1階（アパレル、衣料）、2階（子供服・玩具・文具）と3階分の売り場スペースを占めている。では、これはどうしてなのか。それは阿倍野の地域特性のとらえ方からくる。つまり、あべのキューズモールでは、阿倍野の特性を大阪で第3番目のターミナルという都心性と共に、郊外型の性格が入り交じる地域であると把握するからである。

調査においては、このように現場を自分の眼で見て、そこでポイントとなることをつかむことが大事である。とりわけ外形からわかることを見出すようにする。

4. 9月以降のゼミ予定

今までのゼミ活動の積み上げと実績を踏まえ、今後のゼミ活動の予定に関して、先生からお知らせがあった。ゼミ生は、これらを頭に入れ、見通しと構想をもってゼミに臨むことがもとめられる。詳細は、メーリングリストにより送付されている資料を参照のこと。

(1) 今後のゼミ日程

第1ゼミの場所は、すべて文京学習センターである。時間は10時から18時。第2および第3ゼミの場所は、放送大学幕張本部の放送・研究棟412号会議室。時間は13時30分から18時。

① 10月ゼミ日程

- i 第1ゼミ 10月8日（土）
- ii 第2ゼミ 10月9日（日）

iii 秋合宿 10月28日(金)～30日(日)2泊3日 伊那食品工業と小布施町調査

② 11月ゼミ日程

i 第1ゼミ 11月12日(土)

ii 第2ゼミ 11月13日(日)

iii 第3ゼミ 11月26日(土)

③ 12月ゼミ日程

i 第1ゼミ 12月10日(土)

ii 12月11日(日)は、面接授業

iii 第2、3合同ゼミ 12月24日(土)

(2) DVDの作成

小倉ゼミの活動は、2011年度から本格的に始動した。小倉先生のゼミ運営手法が本格的に展開され始めたからである。こうした基調の中で、「小倉ゼミにおける論文づくりの方法論講義」の実況中継DVDを制作することにした。これは短い時間であっても、学生を目標水準にもっていけるようにするための教材である。

(3) WEBサイトの開設

小倉ゼミのWEBサイトを10月から立ち上げる予定である。ゼミ生の手間を省くため、業者委託により制作する。小倉ゼミからの一方的な情報発信でなく、WEBへアクセスする者と双方向で交流するサイトにしたい。そこで、学生同士の相互交流の情動的基盤をつくるため、ゼミの学生もWEBづくりに参加してほしい。参考になるのは、広島大学大学院社会科学部マネジメント専攻の院生による自己紹介のページである。簡単な書式フォームに記入することで、ゼミ生のプロフィール紹介となるものを作成してほしい。フォームは、近日中に森からメールリストで送付する。サイトでは、小倉ゼミではこういうことをしているという情報発信と共に、コンテンツをメニュー化して発信していきたい。

(4) 秋の長野調査ツアーとゼミ合宿

10月28日(金)から30日(日)の日程で、秋の長野調査ツアーを予定している。調査訪問先は、伊那食品工業と小布施町である。両者には杉山さんが依頼文を送付する。伊那食品工業からの返事はまだだが、小布施町はすでに承諾の返事をもたらしている。

伊那食品工業については、ブロックス社の三宅氏から以下のコメントをいただいた。ブロックス社では、同社の経営紹介DVDを作成している。「伊那食品工業は、寒天という製品の物性を徹底的に深めることで、いろいろな新製品をつくり出し、新しい市場をつくり上げた。それにより、特定市場での高シェアを獲得したので、高収益でもある。また、同社においては、社員が生き生きと楽しく働いている。この意味で、同社は日本のいい企業

を代表する存在である。今回の調査は、よきベンチマークを得る機会にしてほしい」。

次いで、小倉先生が同社に初めて訪問した際のエピソードを披露された。かんでんぱぼガーデン内にある寒天レストラン「さつき亭」に関するエピソードである。以下、先生の言葉で紹介する。

①日本で初めてという寒天レストラン「さつき亭」が会社の敷地の一角にあった。これは、しゃれた趣きを持つ寒天メニューのカフェである。伊那食品は中小企業にすぎないのになぜこんな道楽のようなカフェをつくるのかという疑問が出てくる。

②さつき亭に入り、接客係の女性社員と話しをしていると、「企画課に所属している」という。そして、「この接客業務が自分の本務だ」という。企画課所属の社員がちっぽけな寒天レストランの接客業務をしている。これはなぜなのか？（なお、当時は、寒天レストランにほとんどお客さんがいなかった。というより、小倉先生が唯一の客だった。だから、女性社員とこんな無駄話的な応答もできた）。

③くだんの女性社員が答えるのに曰く、「社長（塚越寛氏）がえらいからです！」。これを聞いて、先生は「ひっくり返りそうに驚き、また深く感心した」。

(5) 修士論文審査

2012年1月7日（土）の予定。

(6) 調査フィールドワーク

第3回フィールドワークは、2月中旬か下旬に予定している。

(7) 「大学院教育のあり方を考える」フォーラムの開催

2012年2月下旬から3月上旬の土曜か日曜を予定している。昨年行われた放送大学大学院「産業と経営領域」の合同レポート検討会の変型である。コースの枠を超えた交流も行いたい。

5. 参加者による本日の感想

参加者の感想は、レポート等の評価をするとき、軸を考えて行うことの大切さに気づいたという点で共通する。具体的には、レポートの善し悪しをみるにも軸があることを知った。評価軸を使って一歩前に進みたい。今日のことを自分なりにまとめ、復習することで全体のつながりを理解したい、などといったことである。ほかにも、他の人へのアドバイスが自分のレポートへの振り返りと気づきになる。今日学んだことは、継続して実行したい。今日、ゼミに出席できてほんとうによかった、などの感想があがった。内容面でみたゼミ講義の充実ぶりがうかがえる感想が次々と述べられた。

以上